

C O R R E N T E

Centro Culturale Italo-Giapponese

ローマで双子育児③

浅田 朋子

双子の娘たちは、9月から公立中学「La scuola secondaria di primo grado (前期中等学校)」に通い始めた。正式にはこの長い名称なのだが、ほとんどの人が昔の呼び名で「scuola media (中学校)」と呼んでいる。中学校は日本と同じく3年間で、年齢は11歳から14歳となる。

入学式は校庭で行われ、在校生の音楽クラブによる歓迎の演奏の後、校長先生からの言葉があり、それぞれ保護者と共に各教室へ移動した。各クラスでは、生徒・保護者が担任の先生から学校生活についての説明を受けた。幼稚園からのママ友、レーナちゃんのロシア人双子の息子たちも私の娘たちとそれぞれ同じクラスになったので、一緒に説明会に参加した。夫は小学校に引き続き、もう片方のクラスに一人で参加した。「また一人か・・・」と夫が寂しそうに呟いた。

この学校では「DADA (Didattiche per Ambienti di Apprendimento)」という「教室移動制教育法」を導入し実施している。イタリアは日本と同じく教室固定制(教師が移動し、生徒が教室にいる)が主流で、2014 年から始まった新しい教育法である DADA を導入している公立校はまだ少ない。

この教育法は、授業の準備や教室移動の時間管理を生徒自身が行うため、生徒の自律性と責任感を育み、各教科に適した専門的な環境で学習をすることでモチベーションを向上させる、というものである。

イタリアでは日本のように「実験室」や「音楽室」など専門的な教室があまり整えられていないので、環境の整った専用の教室で授業を受けることができるのはとても良いと思うのだが、日本の「教室固定制」で育った私としては、「自分のクラスがない」ということが少しデメリットに思える。休憩時間や教科の間にクラスメートと会話をする時間は大切だし、クラスとしてのまとまりも弱くなる気がする。



【教科書や勉強道具がパンパンに入ったリュック】

説明会が終わった後、レーナちゃんに「教室移動の時、自分の荷物全部持って歩くの、大変ななあ・・」という「何言ってるの！ロッカーあるでしょ！」と言われた。確かにオープンスクールの時にロッカーのこと言ってたなあ、と思い出した。イタリアでは教室にロッカーがないところが多いので、これは助かる。

ところが数日後、レーナちゃんから電話がかかってきて「ちょっと、学校からのメールみた？ロッカー、借りないといけないみたいよ・・。」と言うではないか。メールを見ると、学校のメールに続きロッカー貸出業者からの見積書が届いていた。「ロッカーは3タイプ、縦90cm 横30cm、縦60cm 横30cm、縦40cm 横30cm があります。年間契約となります。」・・え、学校のロッカー、年間契約せなあかんの・・？ しかも一番値段の安い縦40cm 横30cm のロッカーには、あんたら学校指定の50センチ定規がそもそも入らんわ！希望者のみとなっているが、ほぼ全ての生徒が契約したようだ。そらそうやろ、みんな自分の子がハウルの動く城みたいになって廊下を歩く姿が目に見えんのだらうなあ・・。

契約すると業者からロッカーの番号とダイヤル式の暗証番号の数字が送られてきた。娘は初めてのダイヤル式ロッカーにワクワクして「暗証番号は手帳に書いてく！」と喜んで学校に行った。

ところが数日後「どう？ロッカー便利？」と聞いたら、予想外の答えが返ってきた。暗い表情で「まだ見つけてない」と言うのだ。見つけてないとはどういうことなのか。

ロッカーの番号と位置を学校側は把握しておらず、生徒は自分でロッカーを探さないとはいけないらしい。しかもロッカーは学校のいろんなところ散らばって設置されており、番号もその場所ごとにバラバラで、生徒は自分の番号が書かれたロッカーをゾンビの様にうろうろと探し歩いているという。「何で学校も業者もロッカーの位置と番号を照らし合わせた控えがないねん！」と夫に愚痴ると「まあ、よくあることだな・・」と苦笑いした。

「あのね、みんな最初は喋らなかつたんだけど、一人じゃ探すの大変だから、みんなで協力してロッカー探してるよ」と言う。ロッカーの番号情報交換をするようになり、グループに分かれて搜索に

行っているようだ。ロッカーゾンビの団結である。また DADA のおかげで「30085 のロッカーを A クラスの子が見つけたらしい」と、違うクラスの生徒との情報交換もスムーズ・・いやいや、こんなところで DADA のメリットはいらないんだけどな。なんだかんだと数日でようやくみんな自分のロッカーを発見できたようであった。

MITO
gli antichi racconti spiegano l'origine del mito
e di elementi incomprensibili, solo anche recenti
sacri, li hanno antichi e sciamani.
PERCHE NASCONO
molte domande agli uomini:
inoltre i sanno rispondere
antichi non sanno rispondere
Era solo ingrado
immaginare
deschivere
le cause di fenomeni
naturali

【国語の授業の一環の MITO (神話) のノート。ギリシャ神話(イーリアス、オデュッセイアなど)についてその内容から創始・建国の精神まで幅広く学ぶ。日本で言うと古事記や日本書紀を学ぶようなもの】

ある日、美術の授業で毎回使う教材を学校から持って帰ってきていたので「これ、ロッカーに入れたらいいのに」と言うのと「・・まだロッカー使ってない」と言う。「なんで？ロッカー見つけたんちゃうの？」と聞くと「開けられない」と言うではないか。開けられない・・？

ロッカーはダイヤル式で回して番号を合わせるのだが、最後の数字を入れるところの力加減と、ドアをひくタイミングが難しく、開けられる生徒は少ないそうだ。「じゃあ、みんなどうしてんの？」「ジュリアちゃんが上手いから、みんなジュリアちゃんに頼んで開けてもらって、開け方も教えてもらってるんだけど、私はまだ順番待ちしてる。」やっと思つたと思つていたら今度は「開けられない」とは・・。手先の器用なジュリアちゃんはみんなから引っ張りだこで、よそのクラスからもお呼びがかかっているらしい。こう言っちゃなんだが、日本の子供に比べるとイタリアの子は不器用な子が多い気がする。しかもその「不器用組」に日本の血が入った双子が入ってしまっていることが、なんだか悲しい。まあ、うちの子、折り紙もあまり上手くないしな。「なんかさ、そんなに難しいのかな

あ…みんな不器用なんちゃうの？」と言うと、「本当に難しいよ！じゃあ学校に来て開けてみたら？」と嫌味なことを言う。



【geografia (地理)のノート】

このロッカー探しと開錠問題が一段落したら、次は「ロッカーに荷物を置きに行く時間がない」ときた。

教室移動の時は全学年・クラスが一斉に動くので廊下は大混雑となる。「ヌーの大移動」さながらみんなひしめき合って移動する。その中を、中学生とはいえ、まだ体の小さい11歳の1年生は大荷物を背負い、高学年のおにーちゃん、おねーちゃんの間を必死に教室まで進むのである。体の小さい女子は流れに巻き込まれないように固まって進むこともあるようだ。まさに野生動物の移動。娘のクラスのジョバンニは、逆の流れに巻き込まれ、教室と遥か離れた場所に行ってしまう、さらにリュックから落ちた荷物を集めつつ、満身創痍で教室にたどり着いたら「遅い！」と先生に怒られたそう。理不尽な…。泣いていいよ、ジョバンニ…。しかしその姿を思い浮かべ、プツと笑ってしまった。「ママ、笑うなんてひどい！」と娘にきつく

怒られてしまった。

授業間の時間は移動するだけで精一杯、ロッカーに荷物を置いたり取りに行ったりする余裕なんて全くなく、結局その日の教科書は全て持ち歩いているのだという。イタリアの教科書はB4に近い大きさがある。日本でも最近「教科書が重い」と問題になっている様だが、いやいや、日本の教科書どころの話ではないのである。イタリアの教科書は教科ごとの冊数もあるし、かさばってものすごく重いのである。「軽量化」なんて全く考えられていないのだ。結果として、恐れていた「ハウルの城」状態で中1の生徒たちはフラフラになりながら教室を移動しているのである。

「中2や中3の生徒はどうしてるんだろうね？移動はどんな感じ？」と聞くと、「友達と喋りながら楽しそうに移動してるよ。荷物もそんなに多くないみたいだから、ロッカーに置きに行ってるんだと思う」という。慣れればヌーの群れも笑顔で通過し、時間割とロッカーから各教室の移動時間を綿密に計算し、ブラック企業並みの過密スケジュールの合間を縫ってロッカーを使いこなすことができるようになるのか…。確かにすごい計画性が必要とされるな。ただこれって DADA のメリットなのかな…。

始まったばかりの中学生活。DADA のしくみで双子の中学生活は一体どうなるのか心配ではあるが、このロッカー探しで友達もでき、問題なく学校に行っているの、とにかく今はそれだけで良いのではないかなと思う。

(元当館語学受講生)

いきなり飛び立つ ボローニャ里帰り留学

竹田 理乃

転職いたしました。いろいろなことがバタバタと決まり、はあーもーさすがに疲れましたわあーと視線を落としたスケジュール帳の退社日から入社日までのあいだに、どうしても動かせない用事がひとつも見当たらない 1 週間ちよいの余白を発見した瞬間、イタリア会館へ「来月、短期留学したいんですけど、今から手続きして間に合いますか？」とメールを送っていました。求職・離職・再就職のあれこれで本人が疲弊きっていたにも関わらずトントン拍子に話が進み、長期でお世話になったのがもう 10 年以上も前になるボローニャの語学学校 Kultūra・イタリアーナへ恙なく里帰りすることができたのは、ひとえに仕事の早いイタリア会館の皆さまのおかげです。短期留学に関して出発前にしたことといえば、イタリア会館経由で送られてきたクラス分け用のテストを受けて、語学学校が用意してくれた下宿の場所を確認したくらいでしょうか。あとはパスポートや航空券、荷物の準備をしたり、週末の遠足や友だちとの晩ごはんを計画したりと、そのあたりは普通の旅行とあまり変わりはありません。むしろお宿の確保を考えなくていいので楽ちんだったくらいです。奇遇なことに、以前に友だちがお世話になっていたネコちゃん付きの下宿へ今度は私が転がり込む運びとなったため、彼女の紹介ですすでにお知り合いだったオーナーさんから「日本から誰かが来るときにお願いしようと思っていたの」とお使いを頼まれたネコちゃんグッズを大急ぎで確保したのが、出発準備としては一番大変でしたが、一番楽しくもありました。

昔、私の留学先をボローニャに決めたのは、恩師でした。当時の私といえば、海外経験はよくあ

る添乗員つきイタリア周遊バックツアーが 1 回きりで、そのうえかなり引っ込み思案な性格だったため、穏やかな田舎でひっそりのんびり勉強したいと思っていたのですが、恩師が「あなたの選んだ小都市もバカンスならば悪くないけれど、イタリアをよく知るにはいろいろな都市を見て歩くべきだから大きな鉄道駅があって、それにいろいろな地方から人の集まる大学があるところがいい。だから絶対にボローニャがいい。きっと好きになる」と押し切ってくださり、本当にその通りになりました。



【ネプチューンの噴水】

Kultūra・イタリアーナという語学学校そのものへの信頼も、恩師が私をボローニャに送り込むことにした理由のひとつだったと思います。さすがにスタッフの顔ぶれなどに多少の変化がありましたが、居心地のよさは今も変わりませんでした。朗らかな物腰とゆったりとした口調、平易な表現で親切にお話してくださるところが、不安でいっぱい初級クラスの生徒に人気のマッシモ校長先生など、懐かしい面々は相変わらず、はじめましての面々も澆涖と、世界中から集まってくる様々なバックグラウンドを持つ生徒たちを温かく迎え入れていらっしゃいました。

イタリア会館の方には10年も経ってから同じ語学学校に入りなおす人は珍しいとお聞きしましたが、クルトゥーラ・イタリアーナにとって馴染みの生徒というのは珍しくないようで、毎週月曜日の入学説明会で「おかえりなさい」の挨拶はたまに耳にします。大学や専門学校、また仕事の場や教会などで活躍するために言語の準備をする王道の留学生はもちろん、バカンスを利用して顔を見せる愛好家もちろほら見かけます。以前に留学していたときには、夏ごとに1週間だけやって来るというイギリス人だったかの老夫婦とご一緒しましたし、今回の私のクラスには、数か月前に短期で留学して気に入ったので、リモートワーク制度を利用してアメリカからとんぼ返りしてきたという人がいました。彼女も前回の滞在時には今回の私の下宿に泊まってネコちゃんに遊んでもらっていたのだとか。

留学というと前途洋々たる若者のすることのように思えてきますが、くたびれた社会人の私でもずっと受け入れたので心配はご無用です。もしも寂しいことがあれば、マッシモ校長先生に「京都出身のリノって知ってる？」と話しかけに行くか、学校主催のアペリティーヴォや課外活動に参加することをオススメします。



【ペポリ宮殿の歴史博物館 エトルリア人の墓】

なかなか会話の機会を得られないというのは、留学初期の学生にとって大きな悩みとなりがちです。このことについてはクルトゥーラ・イタリアーナも気を使っているらしく、アペリティーヴォへの積極的な参加はそれだけでも喜ばれている感触があります。今回はスケジュールが合わず、学校主

催のアペリティーヴォとはご縁がなかったのですが、私も前回の滞在時にはよく参加して、初めはおっかなびっくりノンアルのカクテルを、お酒に慣れてきてからはスプリッツを片手に、山と積まれたモルタデッラをむしゃむしゃ食べながら、どのクラスの誰とも知らない相手を捕まえて、カタコトのイタリア語や英語でお喋りを楽しんでいました。また、街歩きや料理教室などの課外活動の場面でも、先生や生徒とのあいだに会話の機会が発生します。これが授業と同じくらいに見逃せません。私が今回滞在した週にはマッシモ校長先生とボローニャに残るエトルリア人の都市の痕跡をたどる歴史散歩があり、ポイントからポイントへ移動するあいだにイタリア語、英語、スペイン語、ドイツ語などの入り乱れた歓談が盛り上がりました。授業中にはある程度まで先生の目が光りますが、こういふときにはイタリア語以外の得意言語のある人は助け合って意思疎通ができるので愉快です。私の場合は日本語の次に得意なのがイタリア語なので、どちらかというとコミュニケーションの難易度が増すものの、それもご愛敬というもの。

歴史といえば、クルトゥーラ・イタリアーナが入っているペポリ宮殿という建物は、まさにボローニャの歴史を体感するのにぴったりの場所です。たとえば、学校事務室の前にある談話室には天井画がほどこされています。マッシモ校長先生に質問すれば、すぐにその装飾のなかからペポリ家の紋章が描かれている箇所を教えてください。それから一度外へ出て、カスティリオーネ通りを南へ行くと、同じ建物の別の扉からボローニャの歴史博物館に入場できます。都市の基礎を築いたエトルリア人の墓地から始まる展示をゆっくりと追っていくと、やがてボローニャで覇を競った有力な家々を巡る物語のなかで、さっき談話室の天井に見つけたペポリ家の紋章と再会することができます。次の日、教室の窓から中庭を見下ろせば、今は寂しそうに佇むばかりの古井戸を囲んで下働きをしていたかつての住人たちが、イタリア史を動かす貴顕淑女の噂話に花を咲かせていたことが偲べれます。

それにしても、昔、ひとりぼっちでわけもわからず眺めた展示を、小声で「あれはね」と耳打ちしてくれる友だちと一緒に再訪できるような人間関係

を築けたこと、その袖を引っ張りながら「これってもしかしてさ」と解説を求められる程度には自分なりの見識を身につけられたことなど、なんだか感無量でした。



【カステリオーネ通り】

まあ、個人的な感慨はともかく、私が変わったように、イタリアも変わりました。ペポリ宮殿の歴史博物館にお立ち寄りの際には、スマートフォンをしっかりと充電して行ってください。いつからあるのやら、ダウンロードして聞けるオーディオガイドがとても便利でした。人間、文章を読む方が話を掴みやすい人もいれば、音声で聞いた方がやりやすいという人もいます。情報発信の方法にバリエーションが増えるのは大歓迎ですね。私はまだろっこしくて先生に紙でもらっていましたが、クルトゥーラ・イタリアーナも少しずつ DX を進めていて、今では宿題や予定表などはネットで閲覧できるのだとか。かつて行きつけにしていたバルも、メニューはお客さんが自分のスマホから確認するシステムになっていました。こっちはちょっと味気なかった。

クルトゥーラ・イタリアーナの裏手にあるバルはほぼ変わりありませんでしたので、かつての在

学生の皆さまはご安心ください。あのバルで変わったことといえば、タッチ決済に対応したことくらいじゃないかな。なんでも Covid-19 の流行を機に、現金払いからより接触の少ないタッチ決済への移行がものすごい勢いで進み、どこでもピッとやって終わるようになったそうで、今回の滞在中、一度も ATM で現金を引き出さずにすみしました。便利なものです。

お会計の方法がスマートになっても、ボローニャはボローニャのまま。学校帰りにバルに寄って聞くエスプレッソマシンの稼働音とイタリア語が飛び交う店内のざわめき、かわいい砂糖の袋、あの日と同じバリスタさんがひよいと出すカフェマッキアートが懐かしく慕わしく、里帰り留学に大満足です。

(元当館語学講師)

<オンラインレッスン随時受け付けております>

zoom を使用したマンツーマン(1対1)のオンラインレッスンです。こんな方におすすめです！

- ・関西圏以外や海外にお住まいで、イタリア会館で対面のレッスンが受けられない方
- ・外出を控えられている方

受講料や規約はプライベートレッスンに準じます。



編集・発行 / (公財) 日本イタリア会館

〒606-8302 京都市左京区吉田牛の宮町 4

TEL: (075) 761-4356/FAX: (075) 761-4357

E-mail: centro@italiakaikan.jp

URL: <http://italiakaikan.jp/>